

教宣 せぶん

親の無意識

大手ゼネコンの官製談合、視聴率欲しさのテレビ局の捏造報道、食料品会社の食の安全をないがしろにする行為など、企業の不祥事が後を絶ちません。突き詰めれば、すべてが企業利益を確保するための「もっともっと」という姿勢に根源があります。もちろん自由主義経済において、企業が利益を追求していく行為は、ある意味当たり前のことなのでしょうが、サッカーが点を取り合う競技だからと言って「手は使ってはいけない」というルールがあるように、規則や法令、モラルを守ったうえで「その企業利益は確保されなければならない」などということは当たり前のことです。なぜこんな大原則を経営者はすぐに忘れてしまうのでしょうか？ なぜサッカーで手を使って点を取ろうとするのでしょうか？

過去に起きた不祥事から、「顧客」の利益に反しないように、あるいはすべての法令を守るようになど、行き過ぎた企業の利益追求の姿勢を戒めるため、多くの「対策」が講じられてきました。ルール・法令を無視するような企業、顧客や契約者の安全や利益を置き去りにするような企業は、いくら自由競争の世の中であっても「退場させられる」「のれんをおろしてもらおう」というのがいまや社会の常識です。しかし、いま不祥事が取り沙汰されている企業・業界は、いずれも過去に同種の事件を起こしており、「二度と顧客や社会の信頼を裏切らないように」誓ったはずでした。まさに「喉もと過ぎれば熱さ忘れる」行為です。「コンプライアンス」という言葉がむなしく響きます。そして忘れてならないことは、最近の続発する企業の不祥事の影に隠れがちですが、損保業界の保険金不払い問題や保険料もらい過ぎ問題も、これらの企業の不祥事の構造とまったく同じだと言うことですし、働くものに対するルールを無視する東京海上日動社の私たちへの攻撃も、まさに同根の問題です。

ラジオの人生相談にパーソナリティーとして登場する心理学者の教訓に「子供は親の意識に反応するのではなく、無意識に反応する」という言葉があります。いくら親が口で子供に「ものを大切にしろ」と教えても、親が無意識のうちに使えるものを捨てていたら、子供は親の無意識の行為に反応するそうです。いくら経営が口で「コンプライアンス」を唱えても、経営者の「無意識」に利益第一主義の考え方が横たわっている限り、法令を破ってでも利益をあげなければならないという社風や文化はあらたまらないわけです。いくら東京海上日動の経営が法令順守を経営方針の第一の掲げても、片方でそこに働くものの「生活」や「雇用」を、巧妙に、露骨に破壊しようとしていれば全従業員の「法令順守」の意識など高まるはずがありません。いくら口では「人権を大切にせる企業」と宣言しても、狡猾に組合差別を行っているようでは従業員の「モラル」も高まるはずがありません。